

トップインタビュー

鳥取県立中央病院院長

日野 理彦 氏

この人に注目

鳥取大学医学部附属病院 耳鼻咽喉科

國本 泰臣 氏

鳥取で活躍する女性医師

鳥取大学医学部附属病院 女性診療科

藪田 結子 氏

病院探訪

国立病院機構

鳥取医療センター

研修医に聞く

鳥取市立病院

# KLI MI KOS

とっどりの医療

【クリニコス】

春号

2013 spring



このみずみずしさを未来へ  
鳥取県



# KLINIKOS

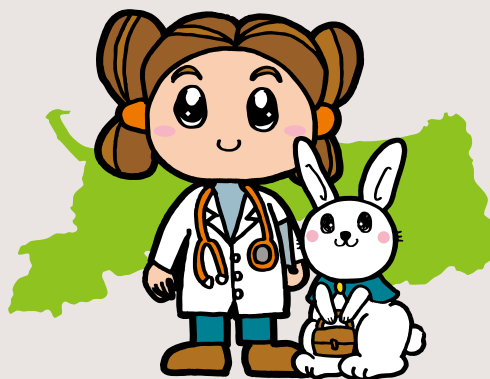
## KLINIKOS (クリニコス) ととりの医療

『KLINIKOS(クリニコス)ーととりの医療』は、鳥取県で展開されている医療の魅力を、現役医師の皆さんの生の声で伝える広報誌です。県内の医療機関ではどのような医師が活躍されているのか、どのような研修、チャレンジができるのか、すばらしい先生方の取り組みや思いを特に若い医師や医学生に発信したいと考えて制作しました。

ギリシャ語の「klinikos」は英語／clinicの語源ともなった言葉で、患者に対する医療行為を意味し、米語辞書の代名詞的存在であるウェブスター辞典では、「臨床講義」や「臨床講義室」を指す言葉として紹介されています。

この冊子に紹介されている先生方や医療機関の取り組みに興味を持たれた方は、ぜひ現場を見学してみてください。願わくば、この冊子が鳥取県で研修、勤務いただくきっかけになれば幸いです。

鳥取県福祉保健部健康医療局医療政策課



医療の神様  
「大<sup>おほ</sup>国<sup>くに</sup>主<sup>あし</sup>命<sup>の</sup>」と、  
神話の地鳥取県

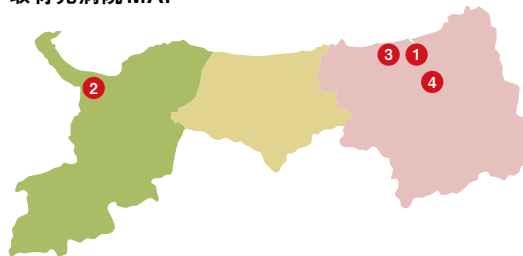
小さな「ありがとう」のために、大きな夢をのせて…。

鳥取県が舞台と言われている神話「因幡の白兔」で、傷ついた兔を救った大國主命は、医療の神様とされています。

## CONTENTS

<p><b>トップインタビュー</b> 4</p> <p>鳥取県立中央病院院長  <b>日野 理彦氏</b>          研修医が最初に言い始め          それが盛り上がっていくのは、この病院の風土かもしれませんね。</p>	4
<p><b>この人に注目</b> 8</p> <p>鳥取大学医学部附属病院 耳鼻咽喉科  <b>國本 泰臣氏</b>          “オトロジコの奥”へ          イタリア留学から世界が見えてきた</p>	8
<p><b>鳥取で活躍する女性医師</b> 11</p> <p>鳥取大学医学部附属病院 女性診療科  <b>藪田 結子氏</b>          海外で働くことも視野に入れ          将来に向けてステップアップできる環境がここにはある。</p>	11
<p><b>病院探訪</b> 14</p> <p><b>国立病院機構 鳥取医療センター</b>          院長／下田光太郎氏          精神的な不安を抱えている家族に          安心してもらうためにも、          私たちの存在は必要不可欠なのです。</p>	14
<p><b>研修医に聞く</b> 16</p> <p><b>鳥取市立病院</b>          どの先生に聞いても教えていただけます。          大部屋の医局なのでいろいろな先生と交流を持つことができます。</p>	16

### 取材先病院MAP



- ① 鳥取県立中央病院 <http://www.pref.tottori.lg.jp/chuoubyouin/>
- ② 鳥取大学医学部附属病院 <http://www2.hosp.med.tottori-u.ac.jp/>
- ③ 国立病院機構鳥取医療センター <http://www.hosp.go.jp/~nisitori/>
- ④ 鳥取市立病院 <http://hospital.tottori.tottori.jp/>



鳥取県立中央病院院長

# 日野 理彦氏

トップインタビュー

**Top Interview**

Norihiko Hino





# 研修医が最初に言い始め それが盛り上がっていくのは、 この病院の風土かもしれませんね。

## 4つの医療を重点整備 鳥取の救急を拡充

2012年4月に院長になったばかりです。基本的には前院長の武田偉先生の方針を引き継ぎ、鳥取県全体の政策医療を担いながら、鳥取県東部の基幹病院として県民の生命を守ることに変わりはありません。特に、①救急医療、②周産期医療、③小児医療、④がん治療の4

つの医療について、重点的に力を入れていかなければならないと考えています。

まず救急医療についてですが、2013年度後半には14床のERを新設する予定です。県立中央病院にはHCCU（ハイケアユニット病床）がありますが、ICU病床はありません。現在は、救急患者さんや術後の患者さんはHCCUで受け入れています。また、麻酔科医は常勤5人と非常勤1人の体制でこなしていますが、

近い将来3名増員できれば、麻酔科管理のICUもできると思います。

現在、救急専門医の岡田稔部長が孤軍奮闘しており、増員をめざしています。ただ都会のように救急医が10人以上もいるような救急救命センターの態勢をとるのは鳥取では難しいと思います。救急医が4〜5人で、救急救命のすべてに対応すると、過重労働になってつづれてしまいます。その例はいくつかの病院でみ

## Profile

ひの・のりひこ

- 1972年 鳥取大学医学部卒業
- 鳥取大学医学部附属病院 臨床研修医
- 1974年 国立東京第二病院 内科レジデント
- 1977年 国立東京第二病院 内科医員
- 1982年 国家公務員共済連合会 呉共済病院 血液腫瘍科医長
- 同 救急部医長
- 1993年 同 中央検査部長
- 1996年 同 内科部長
- 2005年 同 診療部長
- 2006年 国立病院機構 浜田医療センター 副院長
- 同 院長
- 2011年 鳥取県立中央病院 副院長
- 2012年 鳥取県立中央病院 院長

られます。

県立中央病院では、以前から救命救急医だけでなく、各専門の診療科の医師に救命救急センターに入ってもらっています。

例えば、心筋梗塞の患者さんが来たら循環器科の医師が、外傷の患者が来れば外科や形成外科が、急性腹症だったら消化器内科や消化器外科が診るようになっているのです。これが、鳥取の救命救急ではないかと私は考えております。

## 総合診療と救急医療を結合 専門医の強化も進める

この救命救急には、総合診療が深く関わっています。私たちの行っている救命救急は総合診療の一部として行っているともいえます。なぜかと言いますと、フーストタッチ、最初の診療はどんな医師でもできる状態であればいけないからです。

当院の救急診療システムは医師が専門医であるとともに総合診療医でもあることを求められているシステムといえます。

実際に、総合診療と救命救急を結びつけた病院は多くあります。大学病院で救命救急を総合診療教育に充てているところもあります。県立中央病院として総合診療医を病院総合医として育成する事を考えています。私は、総合診療医はすべ

てが整った総合病院でなければ育てられないと思っています。

さらに、県立中央病院はへき地医療拠点病院でもありますので、地域で活躍する医師も育てなければなりません。地域で活躍する総合診療医と病院総合医とはオーバーラップするところも多いと思います。当院でもプライマリケアの専門医が取得できるプログラムを2014年度からスタートさせる予定です。

2012年4月に、吉田泰之部長一人体制で始まった総合診療科ですが、2013年度には血液内科のサブスペシャリティを持った2名の常勤医が加わります。

また、県立中央病院では、総合診療体制の強化だけではなく、専門医の強化も進めています。

医師不足とよく言われますが、医師数は増加しているのに、医療の高度化と細分化によって、医療の専門化が進み、それに対応した医師の増員が必要になってきたために、不足状態になっているのです。専門医志向は患者さんのニーズでもあります。

とりわけ、鳥取県内の病院では医師不足が顕著なので、それに対応するために、基幹病院が専門医を拡充する必要があります。しかし結果的に、県東部地域では県立中央病院にしかない診療科ができてきつてあります。形成外科、血液内科、心臓内科、心臓外科などがそれです。

## 鳥根大学から専門医が転任 放射線治療も拡充する

NICU拡充の工事も始まりました。現在のNICUはとても狭いため、混雑した中では医療ミスにもつながりますし、スタッフのやる気が削がれてしまいます。設備を拡充すれば、その科にぜひ進みたいという医師も出てきます。ここで研修している人たちが産婦人科や小児科を希望してくれることを私は期待しています。今いる医師に辞めたいと思わないようにすることも、重要なことだと思います。

産婦人科は、2013年度に1人増員予定ですが、皆川幸久副院長を入れて5人しかおりません。将来のことを考えると7〜10人体制が望ましいと思います。小児科医は星加忠孝部長以下9人ですが、この地域での対応を考えると最低でも12人は必要であると考えています。

がん治療についても力を入れていきます。鳥取市には、地域がん診療連携拠点病院が当院と鳥取市立病院の2ヶ所あります。がん死亡率が全国ワースト2位というデータも出てきて、鳥取県としてもがん対策は急務となっています。

私たちは、がん対策に力を入れており、2013年4月から腫瘍内科を独立させます。がん化学療法の専門医陶山久司先生に担当してもらいます。研修施



設として認定されますので、若い人にもどんどん入ってきてもらって、専門医を育てていきたいと考えています。

放射線治療にも力を入れます。そのために、2012年4月から鳥根大学教授だった内田伸恵先生に移って来ていただきました。治療がレベルアップして受診する患者さんも増えてきています。また、彼女は人間的にも魅力的な人なので、彼女を慕って若手の女性医師が残ってくれることも大いに期待しています。

## もともとあった 総合診療の指導体制

2013年の臨床研修希望者ですが、8人の募集に対して、8人来ていただけたことになりました。フルマッチです。



研修責任者である麻酔科の内田博先生は、配偶者である放射線科の内田伸恵先生と同様に魅力的な人です。内田博先生は研修医の身になって、きちんと考えてくられて、研修医の信頼が厚いのです。フルマッチできたのは、そういった人間的な要因が大きかったと思います。

県立中央病院は、鳥取県出身の自治医科大学卒業生が初期研修を行う病院になっています。ここでの2年間の研修後に、地域の病院へ派遣されるしくみです。県立中央病院には、総合診療を行えるような人材育成のシステム、指導体制

が、自治医科大学卒業生のために確立されていました。指導体制とは優れた研修カリキュラムと指導医の熱意です。それで2004年にいまの臨床研修制度ができたときも対応できました。もともと各診療科が研修医を育てていくことに非常に熱心でした。そのような環境も、高いマッチング率の背景にあるのだと思います。

2014年からはさらに、臨床研修医の募集枠を広げ、県西部の基幹病院にもなっている鳥取大学医学部附属病院とたすき掛けのカリキュラムで育てていくと

いう、研修プログラムの検討に入ったところでは、2014年度以降、鳥取大学医学部から地域枠の学生が毎年十数名卒業しますので、その受け皿にもなっていたと思います。

これからの医療は、高価な医療機器が必要になっていきます。先端医療にはお金がかかりますが、県立病院ということもあって、県から支援を受けています。

県立中央病院は、放射線機器で遅れたのですが、中村一彦部長の熱意があって現在は急ピッチで整備を進めているところでは、2012年には64列のCT、翌2013年1月には320列のCTを導入します。その後も、3月にはIVR

CTを導入し、5月には3テスラのMRと、放射線、画像診断機器では、日本でもトップレベルとなります。

また高度医療には、医師が多く必要になりますから、現在の常勤医81名を、23年で100名、45年で120名まで増やしていきたいと考えています。医師1人に3〜4ベッドというレベルをめざします。これは高度医療を行う病院の標準です。

とにかく、すべての職種で人材育成に努めます。人材育成こそがこの病院のすべてです。これからの病院の発展は人にかかっているのです。

医師については、専門医資格の取得を目的に学会や研究会への参加を支援して

います。国内外への留学制度も作りました。近々、海外留学第1号が決まるでしょう。

## 「しゃんしゃん祭」の連参加は 研修医が言い始めた

鳥取市は毎年8月に、「鳥取しゃんしゃん祭」という祭典を行っています。もとも鳥取県東部に古くから伝わる「因幡の傘踊り」というものが原型で、それを誰でも踊れるようにアレンジしたものが「しゃんしゃん傘踊り」と呼ばれるものだと思います。

4000人を超える踊り子が「連（れん）」という団体をつくって、傘を持って大通りを練り歩きながら踊ります。県立中央病院の有志も以前から、県庁の連に入って参加していました。いつしか研修医が自発的に、「うちでも連をつくりましょう」と言い始め、武田前院長のときから「中病連」として、独立した連を作ったと聞いています。

今年も私は息切れしそうになりましたが、最後まで参加しました。いまは、参加者も100名ほどに増え、2つの連で踊っています。研修医が最初に言い始め、それが盛り上がりつつあるのは、この病院の風土かもしれません。本当に、この研修医は皆、生き生きしていますよ。



## この人に 注目



〱オトロジコの奥へ  
イタリア留学から  
世界が見えてきた  
鳥取大学医学部附属病院耳鼻咽喉科

# 國本泰臣氏

〱イタリアに世界的な耳の権威がいる〱  
鳥取で耳鼻咽喉科の医師になり、やがて耳にしばって研究を重ね、国際学会に活動を広げていた國本泰臣医師は、イタリアの耳専門病院での留学の機会をつかんだ。北イタリアの小さな町の小さな病院での留学体験は、耳の専門医としての臨床技術を深め、国を越えた医療交流のきっかけになった。

鳥取の田舎から、耳で世界へ

鳥取生まれの鳥取育ちで、ずっと田舎暮らしなので医師になっても都会へ行きたいとか、そんな気持ちはなかったんです。ただ耳鼻咽喉科をやり、年数が上がると耳、鼻、頭頸部腫瘍……と専門に分かれます。松江赤十字病院から大学に戻ってきた時から、耳鼻科

一般から耳メインで仕事をさせて頂くことになりました。その頃から国内の有名病院に手術見学に行ったり、耳の全国学会や国際学会に行き出しました。

耳の専攻から海外へと世界が広がり、イタリアに耳に特化して、すごく有名な先生がいるのを知りました。当

時はまさかそこに留学するとは思っていませんでしたが、医師になって10年、留学の話が出た時に「留学できるならあの先生へ」と。ちょうど先輩もそこに1週間コースの研修にも行かれていた。世界中から医師が集まる権威なのです。

彼の名前はマリオ・サンナ先生。背



が低くてがっちり典型的な南イタリア人で、見た目は恐いんですけど、喋ると冗談ばかりで人を笑わせる。すごくエネルギーシユな先生です。

国際学会で遠くからサンナ先生を眺めていて、すごいなあと思っていました。当時、鳥取大学の大学院で医学博士課程を学んでいたんですが、「どうせ行くなら長く、1年間行けますか？」とイタリアに問い合わせたところ、「いつでもいいよ」と気さくな答えが返ってきました。まさに陽気なイタリアといえますか。

ところが「いつでも来ていいけど給料は出ませんよ」と。困ったなと思っただんですが、鳥取県の医師海外留学資金の貸付制度を知ったんです。これを出していただけがあればありがたい。

こうして**國本医師は2011年、北イタリアのミラノから電車で1時間、小さな町の私立病院、Gruppo Otorolario (グルッポ・オトロロジコ)に留学を始めた。オトロロジコは耳、グルッポはグループの意味。まさに耳専門である。**

### 耳の奥でつながったこと

イタリアで日本の医師免許が使えるのか使えないのか両論があるんですが(笑)、やっぱり最初は見ているだけです。触らせてもらえません。ただ臨

床留学という研究ではなく、手術や解剖の臨床の知識を勉強したかったのです。その点からまず良かったのは解剖実習でした。

解剖は学生時代にやりますけど、医師になり耳鼻科に入り耳専門となつて、年数が経つと、再び解剖で知識を高めたくなるんです。教科書はどうしても二次元なので三次元で学びたい。グルッポ・オトロロジコでは、外国人留学生にいつでも実習ができる環境が用意されていました。ぼくがいたときは7、8名の留学生がいたので、みんな「今日はここまでやろう」「わかった」と。これがよかった。

実は耳の手術には決まったやり方がないんです。何通りかはあるのですが、決まったやり方が確立されていない。例えば、中耳炎の手術では病気を取るだけでなく、聞こえを良くする目的もあります。病気を取ったあとに耳の穴や音の伝わりを直す術を鼓室形成術といいます。国内では作り直しには様々なアプローチがある。もちろんグルッポ・オトロロジコでも中耳炎の手術もしますので、吸収できる良い機会でした。

何しろそこは耳に特化した病院なので耳の手術しかない。特に聴神経腫瘍の手術では世界で一、二を争う術数です。日本では耳鼻咽喉科の医師が、

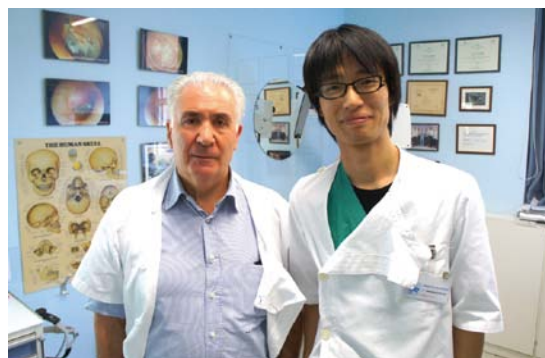
脳外科の医師と一緒に手術するところもあります。基本的には脳腫瘍の手術なんです。耳鼻科のみではやりません。

ところがここでは耳鼻科の先生が耳の奥の骨を削って腫瘍を取る。ぼくらが中耳炎の手術で触るところよりも、もっと深いところを削って、脳腫瘍の手術をするんです。そこで感じたのは「解剖実習が効いている」ことでした。解剖は実際の手術と違って出血はしません。ここまでいったら次にこういう危ないものが出てくるとわかるようになる。奥にはこれがあるので大丈夫とか。これが起きたらこうしようとか。聴神経腫瘍の手術を見て、アシスタントをさせて頂いて、そこが深くつながってきました。

グルッポ・オトロロジコは小さな町の小さな病院である。サンナ医師もまた体軀は小さな男だが、そこには世界中の耳の専門医の耳目を一身に集める大きなスケールがあった。國本医師のイタリアの留学生生活はどんなものだったのだろう。

### 言葉寒し妻恋しも克服

聴神経腫瘍の手術というと、日本の病院ではせいぜい週1度か隔週で1度です。それがグルッポ・オトロロジコに



### ●鳥取県医師海外留学資金貸付金制度

鳥取県が医師の海外留学を支援する制度。医師免許取得後5年以上15年以内の人が対象で、自治医大の卒業者か専門医資格を有する希望者に、留学資金を貸与する。留学後に県内医療施設で従事し、留学で得た成果を講習会で伝えることで返済免除措置がある。

詳しくは <http://www.pref.tottori.lg.jp/124858.htm>

この人に  
注目

はイタリア中、いや欧州中から患者が集まってきましたから、1日3件を月・火・水とやる。一番多いときは一週間に9件。それをどうやるか。

3人の患者を同時に始めて2時か3時には終わらせませす。もちろん昼間のですよ(笑)。すごく速い。それは皆さん解剖がわかっていらっしやるから。一方日本では、ひとりの患者に夕方までかかります。手術時間が延びると患者に負担もかかるので短い方がいい。こういう効率を重視するワークスタイルがライフスタイルにも現れています。

効率よく夕方までに終えて残業はしない。だからだとやるよりスパッとやめて夜はゆっくり食事をしよう。留学生やグルッポの医師とよく夕食に行きました。日本だとそうはいかないですね。

**社会人の留学では「言葉と家族」の問題もある。英語ではなくイタリア語である。国本医師は就業ではなく留学なので学生ビザで渡航した。就労ビザでないために家族にはビザがおりない。2010年に結婚したばかりで「妻恋し」もあつたはず。**

言葉の方の耳はたいへんでした(笑)。イタリアの田舎町ですから英語

が通じない。何を言っているかさっぱりわからない。それでイタリア語の学校にも通いました。帰る頃にはようやくイタリア語がわかるようになりましてけれど、ぼくの前後後に日本人も1人ずついて、一時は3人だったのが心強かったですね。

それに、独りというのは、やっぱり異国の地ではつらかった(笑)。でも他の留学生も同じ境遇ですからね。韓国やヨルダン、スペイン、トルコ、中国、アメリカの留学生同士でご飯を食べに行ったり、楽しくやっていました。妻は結局帰国前の3ヶ月間、来てもらいました。まったく言葉の通じないところで1年間なんとかなるもんだという自信にもなりませんでしたし、一度日本を出ると、やっぱり日本は良い国だと実感できました。

**鳥取から海外を目指してほしい**  
帰国後、聴神経腫瘍の手術に携わり出しています。学んだことをベースに少しずつ増やしていけたらと思っています。

留学してよかったのは知識や経験も



## Profile

## くにもと・やすおみ

1977年 鳥取県米子市生まれ  
2002年 鳥取大学医学部医学科卒業  
2002年 鳥取大学医学部附属病院 耳鼻咽喉科 研修医  
2003年 松江赤十字病院 耳鼻咽喉科  
2006年 鳥取大学医学部附属病院 耳鼻咽喉科  
2006年 鳥取大学大学院医学系研究科医学専攻博士課程 入学  
2011年 鳥取大学大学院医学系研究科医学専攻博士課程 修了  
2011年 イタリア グルッポ・オトロジーコ留学  
2012年 鳥取大学医学部附属病院 耳鼻咽喉科

ありますが、同じ目的を持ち、同じ境遇で働くので、みんなとすごく仲良くなれること。帰国後も国際学会で、留学生やサンナ先生と会うと「元氣か」と食事をして近況を交歓しあいます。そういうつながりがとても貴重です。留学期間中、日本に残した医局のスタッフに迷惑をかけましたし、資金も含めて、周りのサポートがあつてこそでした。これは本当にありがたいですね。結婚して子供ができたり、病院の中でのポストが上がれば、1年間の留学は難しくなります。だから行けるときにチャレンジした方がいいと思います。不安よりも得るものの方が大きいですから、若い医師にどんどん行ってほしいですね。

鳥取大学医学部附属病院耳鼻咽喉科の  
問い合わせ先

鳥取大学医学部附属病院  
耳鼻咽喉科

〒683-8504

鳥取県米子市西町36-1

TEL : 0859-33-1111 (電話番号案内)



海外で働くことも視野に入れ  
将来に向けてステップアップできる  
環境がここにはある。

鳥取大学医学部附属病院 女性診療科

# 藪田 結子氏



## Profile

やぶた・ゆうこ

1995年 北海道大学農学部入学

1999年 北海道大学農学部卒業

2002年 鳥取大学医学部編入学

2006年 鳥取大学医学部卒業

荻窪病院勤務(初期研修)

2008年 慶應義塾大学医学部産婦人科学教室入局

(東京歯科大学市川総合病院、静岡赤十字病院、稲城市立病院に出向)

2010年 結婚

2011年 産婦人科専門医取得

出産(ミャンマーにて)

2012年 慶應義塾大学医学部産婦人科学教室退局

鳥取大学医学部附属病院女性診療科入局

鳥取で活躍する  
女性医師

Yuko Yabuta



## 出産に立ち会ってほしい！ 夫の住むミャンマーで 出産するという選択

「今、思い返してみれば、よくミャンマーでお産をしたと思いますね」

そう語るのは、鳥取大学医学部附属病院女性診療科（旧・産科婦人科）の藪田結子氏だ。鳥取大学を卒業後、東京で勤めていた藪田氏は2010年に結婚し、間もなく妊娠。しかし、妊娠がわかった時、藪田氏は夫と離ればなれに暮らしていた。藪田氏の夫は仕事のためにミャンマーに住んでおり、数ヶ月に1度しか会えなかったという。

「夫は日本で育ちましたが、ミャンマー人で、今はある事業を成功させるためにミャンマーで頑張っています。夫はとても子ども好きで、私の出産に立ち会ってほしいと考えていました。結果的にその願いは無事叶いましたが、自分が産婦人科医だったからこそ、実現できたことかもしれません」

日本で受けた妊婦検診で藪田氏には分娩中にある抗生物質の投与が必要になることがわかったが、ミャンマーの医師はその知識を持っていなかった。そこで分娩前に薬を準備してもらい、点滴を始めるタイミングについても藪田氏自身が指示を出したというのだ。「日本ほど医療が進んでいない国です

から、心もとない部分はいくらかありました。ただ、教科書でしか見ることがない旧式の器具を用いた検査を受けるなど、ミャンマーの産婦人科事情を体験できたのは楽しくもありました」

初めての出産は特に不安が大きいわれる。それを海外で成し遂げ、自分で分娩中に指示を出していたというのだから驚きだ。おっとりとした様子からは想像できないほど、藪田氏はパリタリティーあふれる女性なのだ。

藪田氏は、出産後、それまで働いていた東京には戻らず、鳥取県米子市に移り住んだ。それはなぜだろうか。

「米子に移った理由は、東日本大震災でした。妊娠がわかった後、有給休暇を使い分娩施設を探すべくミャンマーに行っていた時に震災が起きました。

私自身は大きな揺れは経験していませんが、帰宅難民で道路があふれ返っていたり、スーパーから水や食品が消えていたり——そんな報道を見て、私は大きな不安に襲われてしまいました。混乱した東京で夫が不在のまま、頼りにできる人も周りに少ない中、妊婦が安全に生活していけるだろうかと思んだ末に、いったんお休みをもらい、実家の米子に戻ることになりました」

荻窪病院で初期研修を受け、慶應義塾大学医学部の産婦人科学教室に入局。志が高く優れた医師たちが所属

し、多くの症例を扱う慶應義塾大学は、自分にとり最良の場と、慶應義塾大学病院や、その関連病院に向いて経験を重ね、出産後も慶應義塾大学の医局で働こうと考えていたという。

しかし、状況は変わった。東日本大震災は、多くの日本人が今後の生き方について考え、人生設計を考え直すきっかけとなった。藪田氏も、震災で大きな影響を受けたひとり。

「結局、震災後はほぼ米子で生活し、8月にいったんミャンマーに行って出産してからも、米子の実家にいました。が、それでは仕事が続けられません。

慶應義塾大学に残りたかったのですが、結局、辞める決意をしました」

2012年4月に慶應義塾大学医学部の産婦人科学教室を退局してから、今後のことについてしばらく考えた。「夫のもとか米子で、子育てに専念しようかとも考えましたが、ミャンマーで必死に働いている夫に経済的に負担をかけたくありません。そこで子育てをしながら働き続けようと、女性診療科に入局することにしたのです」

## 育休からの復職の ハードルを下げる 手厚い支援制度

藪田氏は、鳥取大学医学部附属病院

のワークライフバランス支援センターの「医師キャリア継続プログラム」を受けている。このプログラムは女性医師がキャリアを形成する上で、出産・育児等のライフサイクルにも離職することなく、安心して仕事を続け、ステップアップしていくためのものである。最長2年間、個々の状況に応じて勤務形態を調整することが認められている。勤務時間は8時間以下で選択ができ、週の出勤日と併せて当事者と病院側が相談した上で決定する。当直や待機も免除されている。

「私は、週5日、6時間勤務としていただいています。主治医にはならないので少々物足りなさを感じることはありますが、子育ての環境を考えると今の勤務形態で精一杯。主治医になってより多くの仕事をしたと思う反面、患者さんに対する責任を果たしきれない怖れがありますから、もう少し今の勤務形態を続けようと思っています」

産休、育休を取得したあとに、現場に戻るのには、体力的にも精神的にも負担が大きいという。そのために復職するのに尻込みする女性医師は少なくない。こうした支援の存在で、復職へのハードルが下がることが期待される。

同センターは2010年に立ち上げられたばかりだが、医師キャリア継続プログラムの利用は徐々に増えてきて



いる。藪田氏をはじめ、この支援を受ける一人ひとりの働き方が、貴重な前例となっていくのだ。

「上司からは、今の仕事量でちょうど良いか、困ったことはないかと声を掛けられます。私がこのプログラムを利用することで、将来この支援を受ける人たちの役に立てばと思います、試行錯誤しながら日々仕事に就いています」

## 医師として働くにも 子育てをするにも 素晴らしい土地

藪田氏は鳥取に移り住む前は、慶應義塾大学病院と、いくつかの関連病院で勤務してきた。藪田氏の目に、鳥取大学医学部附属病院はどのように映っているのだろうか。

「経験できる症例の種類は東京の病院と比べても大差ないと感じています。

東京にはたくさん大病院があるので、患者さんが分散してしましますが、鳥取には大病院が他にありませんから、周辺の患者さんが集まっています。私自身、充実した研修が受けられると考えて、東京の病院で初期研修を受けて、その後も東京で働いていましたが、ここ鳥取でも大都市の病院と遜色ない経験を積めると感じました」

設備としても、手術ロボット、ダビ

ンチ・サージカルシステムやNICUなどが十分にそろっている。

この充実した環境で育った上司、先輩医師から学ぶことも多いはずだ。

また、鳥取での暮らしは妊婦として母として、とても良いものだろうだ。

「私は米子で生まれ育ちましたが、大学進学を機に離れました。この土地のんびりした雰囲気や、刺激の少なさに不満を抱いていたのです。

でも、震災を機に米子に住み始めて、穏やかにお腹の中の子どもを育てるには良い場所だと思いました。また、子どもにとっても、都会のように何もなくても周りに刺激があふれているような環境よりも、川で魚を捕ったり、山で木の実を拾ったりして、自分で遊びを創り出しながら育つ環境の方がよいのではないかと考えます。それに、新鮮でおいしい野菜や魚が

たくさんあるのも良いですね。食べ物で身体をつくるので、やはり良いものを食べさせてあげたいと思います」

## ミャンマーで働くことも 視野に入れて スキルアップを目指す

藪田氏は今後、医師として、そして母としてどのような将来を思い描いているのだろうか。

「私は最初、木の研究をしたいと北海道大学農学部に進学しました。でも、人間相手の仕事をしたい、女性という性を活かしたい、と考え、卒業後、受験勉強の末に鳥取大学医学部に3年次から編入学しました。強い思いをもってこの世界に飛び込み、経験を重ねるごとに、今の仕事がより面白いと感じられました。出産を経験した今は、そ

れも活かしながら、これからもこの道を進んでいきたいと思っています。

いつかは夫と子どもと家族で暮らしたい、第三子まで出産したいという夢もあります。夫が働いているミャンマーは経済的に急成長している国で、1年先さえわかりません。今後、人生設計を立てるのはとても難しいのですが、夢は実現させたいですね。その方法として、ミャンマーに渡り医師として働くことも考えています」

ミャンマーで日本の医師免許が使用でも、その地で働くにはさらに勉強が必要だと、藪田氏は考えている。

「ミャンマーで、自分に何ができるのだろう、どうしたら役に立てるだろう、と考えています。少なくとも今の自分には勉強が必要です。

現状の勤務形態では、主治医として直接、患者さんと関わる機会がない分、時間に余裕があります。それを利用して病棟の患者さんのデータから学んだり、手術を見学したりして感覚を取り戻しているところですよ」

藪田氏のように将来、海外で医療活動を行うことを視野に入れている女性医師は多くないかもしれない。ゆえに、公私両面で十分なサポートができる病院はそうないだろう。母でありながらステップアップできる環境がここ鳥取で築かれようとしている。



# 鳥取医療センター

『古事記』に伝承される、因幡の白うさぎ、の言い伝えが残る白兔海岸。その海岸を見下ろす高台に国立病院機構 鳥取医療センターがある。中国地方の重症心身障害、神経難病治療の中核医療機関として、地域の精神医療の担い手として、確固たる地位を築いている。神経難病の研究も行う「臨床研究部」を持ち、研究施設も充実している。研究マインドを持つ臨床医に、下田院長は熱く訴える。



下田光太郎氏

精神的な不安を抱えている家族に  
安心してもらおうためにも、  
私たちの存在は必要不可欠なのです。

に特化していた国立西鳥取病院と、同じ鳥取市内にあつて精神医療に特化していた国立鳥取病院とが統合し、独立行政法人化を経て、現在の鳥取医療センターがある。

統合時に西鳥取病院の院長として尽力し、統合後、2007年からは鳥取医療センターの院長として病院の指揮を執っているのが、下田光太郎氏だ。

下田氏は、長崎大学医学部を卒業後、鳥取大学医学部脳神経内科に入局、米国での留学期間を除き、以来ずっと鳥取で医療活動を行ってきた。

「重症心身障害も神経難病も精神疾患も、すべて脳・神経系の疾患。ここは、中国地方の精神・神経医療研究センターです」

鳥取医療センターは現在、精神疾患、神経・筋疾患、呼吸器疾患、重症心身障害を重点に置いた医療を行う専門医療機関となっている。そして、西鳥取病院と鳥取病院はかつて、東京都小平市にあるナショナルセンター、国立精神・神経医療研究センターとグループを組んでいた病院だった。現在

も、国立精神医療施設長協議会などを通し、当時一緒にグループを組んでいた全国14施設、国立精神・神経医療研究センターと様々な形で交流が続いている。

■一つの柱である重症心身障害者医療。全国的には120床レベルの施設が多い中で、鳥取医療センターは160床と多い。重症心身障害者の多くは、周産期の障害、特に超未熟児だったり、臍帯巻絡による仮死出産が原因で、生まれた直後から一生、障害を持ってしまふ場合がほとんどだ。

「在宅でみることも難しく、また長期化します。治療すれば治癒し、その後在宅で療養できるというものでもありません。家族の方も疲弊されますし、『私が死んだら、この子はどうなるのだろう』と精神的な不安を抱えている家族もいます。安心してもらおうためにも、私たちの存在は必要不可欠だと思っております」

筋萎縮性側索硬化症（ALS）を含む難病医療にも鳥取医療センターは力

■鳥取駅から国道9号線を車で20分ほど西へむかって走らせると、左手に大きな湖が見えてくる。「湖水池」（こやまいけ）だ。池という名称だが、鳥取県との境にある中海や愛知県の浜名湖と同様、湖の一種だ。この湖畔の高台に、今回の訪問先、国立病院機構鳥取医療センターがある。2005年から

改築が進み、現在はまだで保養施設のような雰囲気を持つ。

高台に向かって上り、鳥取医療セン

ターの入り口に着くと、日本海が眼下に広がる。この海岸は、白兔海岸と呼ばれ、『古事記』の「因幡の白うさぎ」説話に伝えられる地だ。その横には、鳥取空港からジェット機が飛び立つのが良く見える。

■空気がきれいな風光明媚なこの場所は、国立病院の統廃合前まで、結核療養所だった国立療養所西鳥取病院があった。結核患者が激減し、障害者医療



# 患者さんの命を救いたい気持ちは、 一生続いていくもの。 その気持ちを持続させる場所に最適です。

を入れる。

「誰だって自分がALSにならないとは限りません。10万人に数人の確率で罹患するわけです。これも、奥さんだったり、旦那さんだったり、身内の大きな負担の中でみていきます。鳥取県の中に、こういう病院があるという安心感は大いではないでしょうか」

■「回復期リハビリテーション医療」も、鳥取医療センターが重点的に行っ



外来受付から病棟に向かう広々とした廊下をのぞむ

ている医療の一つ。急性期と慢性期の中間にある回復期医療を担う、全国でも数少ない病棟を持っているのだ。対象は脳卒中だけではない。最近、特に問題となっている高齢者の廃用症候群にも対応している。

「若い人でしたら手術の翌日には歩けますが、高齢者はそうはいきませんが、寝たまま1、2週間経ってしまおうと、起き上がって体力を取り戻すまでに結構時間がかかってしまいます。これまでは急性期病院がやっていたことなのですが、DPCを採用し、入院日数を増やせないで、対応が難しくなっている医療機関が多いのです」

■また、他の病院と一線を画しているのが「臨床研究部」という組織を統合。当時から病院内に持っていることだ。国立精神・神経医療研究センターともつながっているだけのことがあって、当初、脳神経系統変性・神経筋疾患・認知症・高次脳機能研究室と先天性および周産期脳障害・脳発達研究室の2部門だけだったが、現在は7部門に拡

充され、基礎研究、臨床研究にとどまらず、リハビリテーションなどについての研究も行っている。

「基礎的な研究もしたい医師がいても、一般病院では研究がなかなかできませんが、ここでは医師としての給与を確保したうえで、研究することも可能です。どんな医師でも、夢と希望を持って難病を治したい、患者さんの命を救いたい、そういう気持ちは、一生続いていくものです。そのモチベーションをずっと持ち続けてもらおう場所として適していると思います」

鳥取空港に近いこともあり、東京からも通おうと思えば通える。月曜日の一便で来て、金曜日の最終便で帰り、東京と鳥取の二つの生活を送っていた研究者もいたという。

「基礎研究をされている方も、臨床面で非常に興味を持っておられます。患者さんと実際に接しているうちにアイデアが浮かぶこともあります。実験動物だけが相手では、なかなかそういうアイディアは生まれません。実際の患者さんを目の前にすると、この人を治して上げたい、というモチベーションも高まっていくようです」

■「やはり神経内科や精神科が中心なので、脳や神経を中心に診療しますが、最終的には人間を治すように、医

師を教育していかなくてはいけないと思っています。ある程度の経験をしないと体全体を診ることはできませんが、最後には臓器や組織ではなく人全体を診られなくてはいけないと思います」

地域医療にも貢献していくため、医療保護措置的な精神医療、医療観察法医療、気分障害の治療を中心とした地域精神医療、この三本柱で精神医療も充実させていくという。そして、2013年2月には、医療観察法病棟が完成し、第二次整備計画が終了する。

取材後に、外来棟を中心に病棟内部を見学させてもらった。廊下はとても広い。壁には棕の木を施し、病院という感じは全くしない。窓が広く、暖かい太陽の光が降り注ぐ。難病の患者を抱えている家族を少しでも励ましたい。そんな気持ちが伝わってくる病院だった。

国立病院機構鳥取医療センターの  
見学などのお問い合わせ先  
**国立病院機構鳥取医療センター**  
〒689-0203  
鳥取県鳥取市三津876  
TEL: 0857-59-1111



# 鳥取市立病院

鳥取市立病院は、地域がん診療連携拠点病院として、がん診療の中心的役割を担っている、鳥取県東部医療圏での中核病院である。高度がん治療を行う一方で、二次救急（一部三次救急）を担当し、総合診療科を開設するなど、地域の病院としても、愛されている。各学会の研修施設、並びに専門医認定施設にもなっており、研修のための環境も整っている。また、医学奨学金制度を設け、医学生時代に一定の条件で奨学金を貸与している。今回は、初期研修1年目の研修医2人に、鳥取市立病院での臨床研修の様子を語ってもらった。



研修医:谷 悠真(2012年岡山大学卒業)

研修医:西川 大祐(2012年鳥取大学卒業)

どの先生に聞いても教えていただけます(谷)  
大部屋の医局なのでいろいろな先生と  
交流を持つことができます(西川)



谷 悠真 研修スケジュール			
1年次		2年次	
4月	麻酔科	4月	地域医療
5月		5月	整形外科
6月		6月	
7月	内科	7月	総合診療
8月	外科	8月	
9月		9月	(選択科)
10月	10月		
11月	11月		
12月	12月		
1月	内科	1月	
2月		2月	小児科
3月		3月	

谷 悠真 1週間のスケジュール (内科)			
	午前	午後	
月	外来・病棟	病棟	
火	外来・病棟	病棟	7:45 ~ モーニングレクチャー
水	内視鏡	病棟	17:30 ~ 内科カンファレンス
木	腹部エコー	病棟	7:45 ~ モーニングレクチャー
金	外来・病棟	病棟	
土			回診 (基本オフ)
日			回診 (基本オフ)

※当直 月4~6回

**Q 谷先生と西川先生、それぞれ出身はどちらでしょうか？**

**谷** 私は地元の鳥取市内で生まれました。大学は親元から離れて暮らしたくて、岡山大学を選びました。

**西川** 私は鳥取ではなく、徳島県出身です。また、最初から医師を志していたのではなく、医学部以外の大学を卒業し、一般企業に就職しました。社会人を経験した後、思うところがあつて、医師を目指すために、鳥取大学医学部に入り直しました。

**Q 医学部に進学された動機は何だったのでしょうか？**

**谷** 医師という職業は、自分の好きなことができ、なおかつ人のために役立つ仕事だと思ったからです。この点が大きいのと思います。

**西川** 私は一度、一般企業で働いていました。しかし会社に慣れてきて、自分の人生を見つめ直したときに、本当にこれでもいいのかなと考えるようになっていました。そんなころ、入院した親族がいたことで次第に医師という職業にあがれるようになり、一念発起して医学部を受けました。

**Q 大学を受け直したのは大変だったのではないですか？**

**西川** 入試より、医学部に入ってからが大変でした。覚悟はしていました。覚えることがいっぱいあって、定期試験をこなすのが大変でした。今の方がもっと大変ですけど(笑)。

**Q 臨床研修としてこの病院を選ばれた理由をお聞かせください。**

**谷** 出身の岡山大学の系列病院であることと、地元であることが大きいですね。また、奨学金の援助もありましたので。

**西川** 私も3年前に、この病院の奨学金制度を知って応募いたしました。応募の条件に、臨床研修をこちらで受けることになっていたことに加え、地域医療に貢献するのが夢でしたから。

**Q お二人とも市立病院の奨学金制度をお使いになっていますね。**

**谷** 応募は年間2人で、学生の時に貸与される代わりに、卒業したら、研修を受けることと、常勤医になることが条件です。学生時代は大変助かりました。

**西川** 地元出身ではなかったのですが、出身地や居住地の制限がないので、応募することができました。

**Q こちらにいられて半年ほど経ちました(取材は2012年11月に行われた)が、実際の研修はいかがですか？**

**谷** 決められた研修日程はありますが、自分がこれをしたと思って、教えてくれる先生のところに行くと、調整してもらえ、とても自由度が高いと思いました。その日、その日を自分の好きなように研修して過ごせるという感じがですね。研修医が多いところは時間が決められているので難しいと思うのですが、自発的に研修しようとする人にはとてもいい病院だと思います。

**西川** 人数が少ないというのはいいですね。自分で選びやすいですし、短期間に様々な症例を見ることができ、とても役に立ちます。

**Q 教えてもらう先生は研修担当の方だけですか？**



西川 大祐 研修スケジュール			
1年次		2年次	
4月	麻酔科	4月	地域医療
5月		5月	整形外科
6月		6月	
7月	内科	7月	総合診療
8月		8月	
9月		9月	(選択科)
10月		10月	
11月		11月	
12月		12月	小児科
1月		1月	
2月	外科	2月	(選択科)
3月		3月	

西川 大祐 1週間のスケジュール (内科)			
	午前	午後	
月	外来見学	病棟	
火	外来見学	病棟	7:45 ~ モーニングレクチャー
水	外来見学	病棟	17:30 ~ 内科カンファレンス
木	エコー実習	病棟	7:45 ~ モーニングレクチャー
金	病棟	病棟	
土	日直	日直	
日	×	×	

**谷** いいえ。どの先生に聞いても教えていただけません。人数が少ないからこそ、かわいがってもらえるようなところがありません。

**西川** 医師数がほどよい感じで、指導医の先生がやっていることがよく分かります。また、医局といっても、全科の先生が集まっている大部屋で、いろいろな先生と交流を持つことができず。一緒にいる時間も長くなるので、**「門前の小僧」**ではないですが、自然と医師としての対応が身についていきます。

**Q** 今はどちらの科を回っていらっしゃるのですか？

**谷** 内科です。

**西川** 僕は内分泌代謝系です。研修医が同じ科にいることはありません。2年目になると、総合診療科があつて、後半は診療科を自分で選択することになります。

**Q** 今まで回ってきた診療科で印象に残っていることはありますか？

**谷** 外科でオペに入って助手をやらせてもらったことが、結構自分に合っているな、と感じています。将来は外科

の方に進みたいですね。

**西川** いま内科を回っていますが、付いている先生は、どんな質問にも、きちんと論理的に答えてくれるので、すごいなというのが印象です。早く、自分もこうなりたいですね。

**Q** 1日のスケジュールは決まっているのでしょうか？

**谷** 結構、自由度は大きいと思います。科によっては決められていることもありますが、ガチガチではありません。この曜日の朝は先生と一緒に外来とか、この曜日は内視鏡とか、腹部エコーとか、ざっくりとしか決まっています。とにかく、人数が少ないので順番待ちが全くないのが魅力です。

**Q** カンファレンスはいかがでしょう？

**谷** 科目別に定期的に行っています。科によっては朝一番というのもあります。また、カンファレンスとは別に、研修医向けにセミナーもやっています。例えば、総合診療科の先生が、僕たちに症例を呈示し、考えさせながら説明してくれます。違う曜日には、せき、貧血、腹痛などのテーマ別に、コ

● 鳥取市立病院医師奨学金制度

将来鳥取市立病院で医師として勤務していただける医学生に奨学金を貸与することで、医学生の修学を支援し、鳥取市立病院に必要な医師の確保を図ることを目的に2009年度に創設。  
詳しくは <http://hospital.tottori.tottori.jp/syougakukin/syougakukinannai.htm>

**Q** 将来はどうされる予定ですか？

**谷** 私は地元ですし、この病院がともにも気に入っていますので、将来も、ここで働ければと思います。

**西川** 私は他県から鳥取に移ってきて、この場所がとても気に入っています。地域医療に貢献したいという夢を持っていますので、この鳥取の地では非、お役に立てればと考えています。



# KLINIKOS バックナンバー



2010年冬号

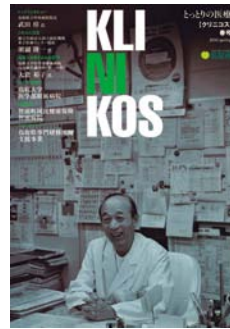
**トップインタビュー**  
鳥取大学医学部附属病院院長  
豊島 良太氏

**この人に注目**  
鳥取県立総合療育センター 療育支援シニアディレクター  
北原 侑氏

**鳥取で活躍する女性医師**  
鳥取大学医学部皮膚病態学講師  
山田 七子氏

**来たれ研修医!**  
鳥取県立中央病院

**病院探訪**  
日南町国民健康保険日南病院



2010年春号

**トップインタビュー**  
鳥取県立中央病院院長  
武田 倬氏

**この人に注目**  
独立行政法人国立病院機構 米子医療センター院長  
濱副 隆一氏

**鳥取で活躍する女性医師**  
鳥取大学医学部附属病院 内分泌代謝内科（第一内科）  
大倉 裕子氏

**来たれ研修医!**  
鳥取大学医学部附属病院

**病院探訪**  
智頭町国民健康保険智頭病院



2010年夏号

**トップインタビュー**  
鳥取市立病院院長  
田中 紀章氏

**この人に注目**  
鳥取大学大学院医学系研究科教授/  
鳥取大学染色体工学研究センター センター長  
押村 光雄氏

**鳥取で活躍する女性医師**  
智頭町国民健康保険智頭病院内科  
渡邊 ありさ氏

**来たれ研修医!**  
山陰労災病院

**病院探訪**  
岩美町国民健康保険岩美病院



2010年秋号

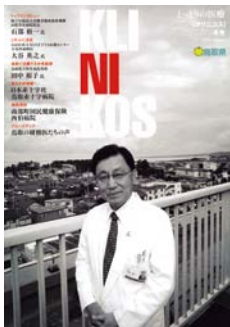
**トップインタビュー**  
鳥取県立厚生病院院長  
前田 迪郎氏

**この人に注目**  
社会医療法人仁厚会  
藤井政雄記念病院副院長・緩和ケア科棟棟長  
足立 誠司氏

**鳥取で活躍する女性医師**  
鳥取赤十字病院眼科副部長  
高橋 芳香氏

**来たれ研修医!**  
鳥取生協病院

**病院探訪**  
日野病院組合日野病院



2011年冬号

**トップインタビュー**  
独立行政法人労働者健康福祉機構  
山陰労災病院院長  
石部 裕一氏

**この人に注目**  
自治医科大学とちぎ子ども医療センター 小児科研修医  
大谷 英之氏

**鳥取で活躍する女性医師**  
鳥取県立厚生病院外科  
田中 裕子氏

**来たれ研修医!**  
日本赤十字社鳥取赤十字病院

**病院探訪**  
南部町国民健康保険西伯病院



2011年春号

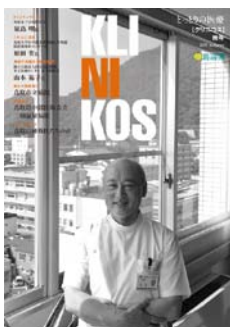
**トップインタビュー**  
鳥取県立総合療育センター院長  
鱈 俊朗氏

**この人に注目**  
鳥取大学医学部救急・災害医学分野教授  
鳥取大学医学部附属病院 救命救急センターセンター長  
本間 正人氏

**鳥取で活躍する女性医師**  
鳥取生協病院内科医師  
平田 雅子氏

**来たれ研修医!**  
鳥取県立厚生病院

**病院探訪**  
江府町国民健康保険江尾診療所



2011年冬号

**トップインタビュー**  
鳥取赤十字病院院長  
福島 明氏

**この人に注目**  
鳥取大学医学部生殖機能医学教授 低侵襲外科センター長  
原田 省氏

**鳥取で活躍する女性医師**  
独立行政法人国立病院機構  
米子医療センター 耳鼻咽喉科  
山本 祐子氏

**来たれ研修医!**  
鳥取市立病院

**病院探訪**  
鳥取県中部医師会立三朝温泉病院



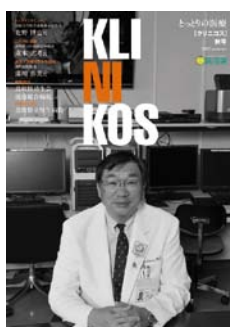
2012年春号

**トップインタビュー**  
鳥取生協病院院長  
齋藤 基氏

**この人に注目**  
鳥取大学医学部地域医療学講座教授  
谷口 晋一氏

**学会ルポ**  
第4回鳥取県国保地域医療学会

**来たれ研修医!**  
国立病院機構米子医療センター



2012年秋号

**トップインタビュー**  
鳥取大学医学部附属病院院長  
北野 博也氏

**この人に注目**  
鳥取県立中央病院麻酔科  
乗本 志考氏

**鳥取で活躍する女性医師**  
湯川医院院長  
湯川 喜美氏

**病院探訪**  
鳥取県済生会境港総合病院

**研修医に聞く**  
鳥取県立厚生病院

## STAFF

発行 鳥取県福祉保健部健康医療局医療政策課  
(<http://www.pref.tottori.lg.jp>)

編集制作 株式会社メディカル・プリンシプル社  
(<http://www.medical-principle.co.jp>)

制作コーディネイト 原誠一郎、杉浦美奈子

制作協力 Mamasクリエイティブ株式会社

エディター 松田淳

ライター 郷好文（株式会社ことば）、横山奈緒

カメラマン 寺尾豊

# KLINIKOS

ととりの医療  
春号

2013 spring



# 鳥取県で初期臨床研修をしませんか

鳥取県は県と県内臨床研修病院が協議会を立ち上げ、研修医のための様々な取り組みを行っています。また、医学生が県内臨床研修病院を見学する場合には旅費を支給しています。

## 鳥取県臨床研修指定病院協議会の事業

- ・ 研修医の受講する救急講習（ACLS,BLS,ICLS）受講料を助成します。
- ・ 年1回各病院の研修医が集まる研修医交流会を開催します。
- ・ 研修医を対象とした県外・海外著名講師による臨床研修医セミナーを開催します。
- ・ 鳥取県東部4病院（県立中央病院、鳥取市立病院、鳥取赤十字病院、鳥取生協病院）にマッチングした研修医は、様々な特色を持つ4病院で希望に応じた研修を行うことができます。

## 鳥取県臨床研修指定病院協議会のホームページをぜひご覧ください。

鳥取県の臨床研修病院の魅力を知らいただくため、ホームページを作成しています。各病院の最新情報、プロモーションビデオなど魅力満載ですので、ぜひご覧ください。



<http://www.tori-rinsyou.jp/index.php>

鳥取県 臨床研修

検索

# 鳥取県で働いてみませんか

鳥取県は医師のキャリア形成、子育て後の復職などについて積極的に支援しています。

## 地域医療に関心のある方へ

- ◆鳥取県医師登録・派遣システム（ローテートコース）  
複数の公立病院等をローテートしながら、鳥取の医療の現場を経験できます。（その間に研修を行うことができます）

## キャリア形成を考えている方へ

- ◆鳥取県専門研修医師支援事業  
県外の医療機関に県職員として研修派遣します。
- ◆鳥取県医師海外留学資金貸付制度  
海外留学のための就学資金を貸与します。



鳥取県は民間求人サイト「e-doctor」に特設ページを掲載しています

## 子育て等で現場を離れ、復職を考えている方へ

- ◆鳥取県医師登録・派遣システム（子育て離職医師等復帰支援コース）
  - ・ 鳥取大学医学部附属病院ワークライフバランス支援センターと協力し、現場復帰のための研修を県立病院、鳥大附属病院等で行います。
  - ・ 研修後の復職についても、仕事と家庭の両立に配慮した医療機関を紹介します。

## 鳥取県内の求人情報を探している方へ

- ・ 県内医療機関の求人情報の提供、あっせん、紹介を行います。  
※鳥取県は無料職業紹介事業を行っています。

（見学を希望される方へ）

- ・ 県外の方で病院見学を希望される場合は、旅費を支給しています。まずはお気軽にお問合せください。

<http://www.pref.tottori.lg.jp/iryouseisaku/>

鳥取県 臨床研修

検索



■お問い合わせ先 鳥取県福祉保健部健康医療局医療政策課医療人材確保室

〒680-8570 鳥取県鳥取市東町 1-220

電話：0857-26-7195 ファクシミリ：0857-21-3048 E-mail：ishikakuho@pref.tottori.jp